

新国立劇場 2016/2017 シーズン演劇公演

かさなる視点—日本戯曲の力— vol.2

城塞

作◎安部公房
演出◎上村聡史

2017年4月13日(木)～4月30日(日)
新国立劇場 小劇場

安部公房が描く「戦争責任」とは——？ 意欲作に気鋭の演出家・上村聡史が挑む

新国立劇場ではシリーズ「かさなる視点—日本戯曲の力—」と銘打ち、昭和30年代に執筆され日本近代演劇の礎となった3つの名作を、30代の気鋭の演出家三人の手に委ね、2017年3月から3ヶ月間連続で上演いたします。

その第二弾として4月に安部公房作『城塞』を上演します。戦後17年経った1962年に書かれた『城塞』は、戦争によって富を築いたブルジョア階級の責任を問う安部公房の痛烈な視点が際立つ作品です。

演出には近年活躍著しい上村聡史を迎えます。新国立劇場では、2013/2014シーズンにサトル作『アルトナの幽閉者』を演出。難解で複雑な構造の戯曲を鮮やかに視覚化し、質の高い舞台成果を上げたことは記憶に新しいところです。常に問題意識を持ち、時代や状況に批評精神を投げかける上村の演出と、山西惇、たかお鷹、辻萬長ら魅力的な俳優陣で創りあげる新しい『城塞』にご期待ください。

【1月29日(日)チケット前売り開始 ☎ 新国立劇場ボックスオフィス 03-5352-9999】

写真・資料のご請求、取材のお問い合わせ

◎新国立劇場 制作部演劇 広報担当 藤沢 花

TEL: 03-5352-5738 / FAX: 03-5352-5709

◎新国立劇場 制作部演劇 制作担当 三崎 力、田中晶子



新国立劇場

<http://www.nntt.jac.go.jp>

◎あらすじ

とある家の広間。爆音が響く。電燈が尾を引いて消える。どうやら戦時下のようなのである。「和彦」と呼ばれる男とその父が言い争っていた。父は「和彦」とともに内地に脱出しようとするのだが、「和彦」は母と妹を見捨てるのか、と父を詰る。

しかし、それは「和彦」と呼ばれる男が、父に対して仕掛けた、ある“ごっこ”だった……。

◎演出 上村聡史からのメッセージ

太平洋戦争における日本の敗戦は、現代に至るまでの私たちの生活にさまざまな影響を与えてきました。そして戦後の崩壊した風景から、政治、科学、経済の進歩とともに成長したこの国日本は、衛星カメラでみると電力という名の光が二十四時間、途絶えることなく燦々と輝いて映る、そんな国にまで成長を遂げました。その国に生きる私たちの生活は充足する満足感に溢れましたが、これからの10年後、100年後を見据えると、なぜか不安に満ちた個人の虚無感と全体の閉塞感が溢れ、混沌とした浮遊感によって現在の生活が形成されているように思います。全体と個の在り方はますます乖離し、己の為に生きることは、もはや利己の為に生きることへと変換されてしまったような気がします。

昭和37年(1962年)に初演された『城塞』は、敗戦から17年後のある富裕層の邸で、男、その父、男の妻、家に仕える従僕、男に雇われた若い女、という不可思議に集った共同体が、敗戦の記憶を持ちながらもそれぞれの立場から利己の主張によって、この共同体のバランスが危うい状況へと変化していく筋立てになるのですが、彼らの抱える特権階級意識、戦争観、愛国精神に対する言及は、どこか危機意識や未来への憧憬を喪失した現在の無自覚な私たちと繋がっているようでもあります。そして登場人物たちはこの危機的状況にある手段を用いて回避しようとはしますが、それは紛れもなく人間が古代から現代に至るまで行ってきた“夢へと渡る魅惑的な儀式”であり、そのあたりの人間の不変的な感覚と現代の進歩に歩調を合わせながら合理的に生きる感覚が、喜劇的なバランスで表出されていくところにこの戯曲の妙味があるのでしょう。

そのような安部公房が紡いだ劇世界に対し、戦後から現代に繋がる日本人の精神を時にグロテスクに、かつ愚かに、そして何よりも“今”に対する鋭い批評眼を持って描くことが、今回の私の重要な役割のように思います。

◎プロフィール

作◎ 安部公房 (あべ・こうぼう)



小説家、劇作家、演出家。1924－1993年。

1948年に最初の小説、『終りし道の標べに』を出版。以降、精力的に作品を発表し、日本国内のみならず、海外でも高く評価される。

演劇の分野では50年代から戯曲を書き始め、劇団俳優座等で上演されていたが、73年には自身が主宰する演劇集団「安部公房スタジオ」を立ち上げ、劇作家、演出家としても活躍した。

51年に『壁-S・カルマ氏の犯罪』で芥川龍之介賞、58年には戯曲『幽霊はここにいる』で岸田國士戯曲賞を受賞。

演出◎ 上村聡史 (かみむら・さとし)



1979年生まれ。2001年文学座付属演劇研究所に入所。06年座員に昇格、09年より文化庁新進芸術家海外留学制度により1年間イギリス・ドイツに留学。14年に新国立劇場で上演された『アルトナの幽閉者』をはじめ他の演出作品で第17回千田是也賞を受賞。また演出を手掛けた『炎 アンサンディ』が第69回文化庁芸術祭賞大賞、また第22回読売演劇大賞最優秀演出家賞を受賞。主な演出作品に『AWAKE AND SING!』『連結の子』『未来を忘れる』『信じる機械』『ボビー・フィッシャーはパサデナに住んでいる』『当世極楽気質』『悲しみを聴く石』『対岸の永遠』『グリークス』『弁明』、ミュージカル『マダー・バラッド』、オペラ『人間の声』など。

男 ◇ 山西 惇(やまにし・あつし)



1962年生まれ、京都府出身。京都大学工学部石油化学科卒業という異色の経歴を持つ。劇団そとばこまち出身。近年はTV『Qさま!!』などバラエティ番組でも活躍中。最近の主な出演作に、舞台『木の上の軍隊』『ヒトラー、最後の20000年～ほとんど、何も無い～』『イニシユマン島のビリー』『スコット&ゼルダ』『七人ぐらゐの兵士』『藪原検校』『てんぶくトリオのコント～井上ひさしの笑いの原点～』『百年の秘密』など。新国立劇場では『雨』『象』『マニラ瑞穂記』に出演。映像では映画『イニシエーション・ラブ』、TV『相棒15』『真田丸』『水族館ガール』『心がポキッとね』など。17年2～3月舞台『陥没』、2月11日公開映画『相棒-劇場版IV-』に出演予定。

男の妻 ◇ 椿 真由美(つばき・まゆみ)



1968年生まれ、神奈川県出身。1992年青年座研究所から劇団青年座に入団、その年学校公演『バーバパパ』で初舞台以降、劇団青年座公演の中核を担う。主な劇団公演として『ブンナよ木からおりてこい』『MOTHER』『悔しい女』『横濱短篇ホテル』『からゆきさん』『俺の酒が呑めない』等、外部公演では『頭痛肩こり樋口一葉』『マリアの首』『喜劇有頂天旅館』『甘い丘』、新国立劇場では『その河をこえて五月』に出演。

若い女(踊り子) ◇ 松岡依都美(まつおか・いづみ)



1980年生まれ、三重県出身。文学座所属。最近の主な舞台として『信じる機械 - The Faith Machine -』『女の一生』『再びこの地を踏まず - 異説・野口英世物語 -』『トロイラスとクレシダ』『紙屋町さくらホテル』『弁明』など。新国立劇場では『ヘンリー四世』に出演。舞台以外にも近年では映画『縫い裁つ人』『味園ユニバース』『残穢』『海よりもまだ深く』『日本で一番悪い奴ら』『永い言い訳』などに出演。『凶悪』で第28回高崎映画祭最優秀新進女優賞を受賞するなど活躍の場を広げている。

従僕(八木) ◇ たかお鷹(たかお・たか)



1948年生まれ、福岡県出身。文学座所属。最近の主な舞台として『藪原検校』『トロイラスとクレシダ』『セールスマンの死』『ジュリアス・シーザー』『ハムレット』『國語元年』『ガラスの仮面』など。『缶詰』で第55回芸術祭優秀賞、『ゆれる車の音』および『錦鯉』で第41回紀伊國屋演劇賞個人賞、『殿様と私』で第62回芸術祭大賞および第15回読売演劇大賞優秀男優賞を受賞。新国立劇場では『野望と夏草』『ピカドン・キジムナー』『母・肝っ玉とその子供たち』『氷屋来たる』『現代能楽集鶴』『雨』に出演。舞台のほか、テレビ、映画、ラジオドラマ等でも活躍している。

男の父 ◇ 辻 萬長(つじ・かずなが)



1944年生まれ、佐賀県出身。俳優座附属俳優養成所卒業。井上ひさしに関係する作品を上演する「こまつ座」所属。井上作品として『黙阿彌オペラ』『闇に咲く花』『日本人のへそ』『藪原検校』『人間合格』『父と暮せば』『きらめく星座』『ムサン』等、その他の主な舞台として『皆既食』『タンゴ』『GHETTO/ゲッター』『ピアフ』『尺には尺を』等に出演。『ボンソワール・オッフエンバック』で芸術祭優秀賞、『化粧二題』で読売演劇大賞優秀男優賞、『雨』および『ロンサム・ウェスト』で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。新国立劇場では『紙屋町さくらホテル』『ピカドン・キジムナー』『箱根強羅ホテル』、東京裁判三部作『夢の泪』『夢の痴』、『アルトナの幽閉者』に出演。

◎マンスリー・プロジェクトについて

一人でも多くの方に気軽に劇場に足を運んでもらいたいと、“開かれた劇場”を目指す芸術監督の宮田慶子。その一環として、演劇講座あり、リーディングあり、トークショーありの、多彩な無料プログラムを用意し、その月々に関連した演劇公演に多角的にアプローチしています。

募集期間内に、新国立劇場ウェブサイト所定のフォーマットでのお申し込みが必要です。詳しくは、新国立劇場マンスリー・プロジェクトのウェブサイト (<http://www.nntt.jac.go.jp/play/monthly/>) か、情報センター(03-5351-3011(代))でご確認ください。

演劇講座「シリーズ『日本の劇』VII～IX」

講師: ふじたあさや(劇作家・演出家)

会場: 新国立劇場 情報センター

募集期間: 12月1日(木)～

VII 「近代戯曲以前」

日時: 2017年2月17日(金)18:30、18日(土)11:00

開国による近代化とともに、演劇にも近代化が求められた明治時代、我が国が持っていた演劇は、能、狂言、歌舞伎だけだった。「欧米には、普段しゃべっているみたいに台詞を言う芝居があるそうだ。それをやってみよう。」しかし……。

VIII 「戯曲が文学だったとすると」

日時: 2017年3月17日(金)18:30、18日(土)11:00

旧劇を近代化し、新劇を確立するために、文学者たちの果たした役割は大きい。「旧劇が新作を作る力を持ってないなら、おれたちが作るより仕方がない。」泉鏡花・森鷗外・真山青果・岡本綺堂・菊池寛・山本有三・久米正雄などの活躍。

IX 「リアルとリアリズムの間で」

日時: 2017年4月14日(金)18:30、15日(土)11:00

近代戯曲がとりあえずの目標に据えたのは〈リアル〉ということだった。だが、〈社会主義リアリズム〉の台頭は、その〈リアル〉に大きな揺さぶりをかけた。その中で真の〈リアル〉を求め続け、〈リアル〉を突き抜けた人々がいる。

トークセッション「かさなる視点—日本戯曲の力—」

出演: 谷 賢一、上村聡史、小川絵梨子、宮田慶子

日時: 2017年5月13日(土)18:00～

会場: 新国立劇場 小劇場

募集期間: 2月9日(木)～

『白蟻の巣』『城塞』『マリアの首』の演出家たちが結集。日本戯曲の魅力や、お互いの作品、演出について、思う存分意見を交わします。視点はどこへ向かい、何を感じたのか? 宮田監督を交えてシリーズを振り返ります。

◎公演概要

【タイトル】 城塞

【スタッフ】	作	安部公房	【キャスト】	山西 惇
	演出	上村聡史		椿 真由美
	美術	乗峯雅寛		松岡依都美
	照明	沢田祐二		たかお鷹
	音響	加藤 温		辻 萬長
	衣裳	半田悦子		
	ヘアメイク	川端富生		
	映像	栗山聡之		
	演出助手	五戸真理枝		
	舞台監督	北条 孝		
	芸術監督	宮田慶子		
	主催	新国立劇場		

【会場】 新国立劇場 小劇場（京王新線 新宿駅より1駅、「初台駅」中央口直結）

【公演日程】 2017年4月13日（木）～4月30日（日）

2017年 4月	13 木	14 金	15 土	16 日	17 月	18 火	19 水	20 木	21 金	22 土	23 日	24 月	25 火	26 水	27 木	28 金	29 土祝	30 日
13:00			●	●		★	●	●		●	●		●	●	●		●	●
18:00					休演					●		休演					●	
19:00	●	●							●							●		

★＝終演後、シアタートークあり

【前売開始】 2017年1月29日（日）10:00～

【料金】 A席6,480円 B席3,240円（税込）

※「かさなる視点—日本戯曲の力—」三作品通し券を発売中。

3月公演『白蟻の巣』、4月公演『城塞』、5月公演『マリアの首』A席をセットで正価19,440円のところ、セット価格17,400円で販売。

【チケット申し込み・お問い合わせ】

新国立劇場ボックスオフィス TEL:03-5352-9999（10:00～18:00）

新国立劇場Webボックスオフィス <http://pia.jp/nntt/>

【その他チケット取り扱い】

チケットぴあ、イープラス、ローソンチケット ほか

* **Z席1,620円** 公演当日10時よりボックスオフィス窓口で販売。1人1枚。電話予約不可。* **当日学生割引** 公演当日残席がある場合、Z席を除く全ての席種について50%割引にて販売。要学生証。電話予約不可。* 新国立劇場では、高齢者割引（65歳以上5%）、障害者割引（20%）、学生割引（5%）、ジュニア割引（中学生以下20%）など各種の割引サービスをご用意しています。